

平成二十三年春の展示会報告

平成二十三年春の特別展(四月二日(土)～四月二十一日(木))では、「国立公文書館創立四十周年記念貴重資料展Ⅰ 歴史と物語」と題して、当館が所蔵する古書古文書及び公文書の中から、古代から近世にかけて朝廷や幕府が編纂した代表的な歴史書、軍記物や歴史物語の数々、中国で出版された歴史書や歴史物語等を展示しました。加えて最後のコーナーでは、仁正寺藩主市橋長昭が湯島聖堂に献上した宋版・元版等の貴重な漢籍も展示しました。展示資料は全六十五点。うち主な展示資料は左の通りです。

【古事記と六国史】

古事記(二じき)

神代の創世神話から推古天皇の時代までの歴史を記した、わが国の現存最古の歴史書。展示資料は、慶長十九年(一六一四)写。徳川家康が慶長十九年から翌年にかけて、公家や寺社が秘蔵する古書古記録を書写させた「慶長御写本」の一つで、紅葉山文庫旧蔵。全三冊。

日本書紀(にほんしよき)

元正天皇の養老四年(七二〇)に完成したとされる、わが国最古の勅撰の国史。展示資料は、三条西実隆が作成した写本を慶長年間に転写したもので、三十巻完備した『日本書紀』としては現存最古。紅葉山文庫旧蔵。全十冊。

【幕府の歴史編纂】

吾妻鏡(あずまかがみ)(重要文化財)

治承四年(一一八〇)から文永三年(一二六六)まで、鎌倉幕府の歴史を歴代將軍の年代記の体裁で記した書。西暦一三〇〇年前後の成立と推定されている。展示資料は、小田原北条氏の旧蔵と伝えられる「北条本」の『吾妻鏡』で、紅葉山文庫旧蔵。全五十一冊。

後鑑(のちかがみ)

徳川幕府が万延元年(一八六〇)に完成させた室町幕府の歴史。元弘元年(一三三二)から慶長十年(一六〇五)までの事蹟が編年体で記され、「附録」に歴代將軍の逸事等を収録している。展示資料は、『後鑑』の初稿本で、全二百六十六冊。

【物語風の歴史】

栄花物語(えいがものがたり)

朝廷による歴史編纂が途絶えたのち、十一世紀に仮名文で記された物語風の歴史書。藤原道長の栄華や宮廷社会の様子が情感豊かに叙述されている。作者は赤染衛門など貴族の女房と推定されている。展示資料は、江戸初期の刊本で、林家旧蔵。全二十冊。

【平家物語】

平家(へいけ)

平家一門の盛衰を源平の合戦を中心に描いた軍記物、歴史物語。展示資

料は「語り本系」の「覚一本」に属する写本で、神龍院の住職梵舜が天正十八年（一五九〇）に書写したものである。紅葉山文庫旧蔵。全十二冊。

【太平記と太平記読】

太平記（たいへいき）

後醍醐天皇の倒幕計画に始まり、半世紀にわたる南北朝内乱期の歴史を描いた書。軍記物語であると同時に室町幕府草創期の時代像・人物像を描いた壮大な歴史叙述としても貴重である。『平家物語』と共に歴史物語の宝庫として、後世の文学や芸能に多大な影響を及ぼした。展示資料は、天正六年（一五七八）に野尻慶景が書写したものである。紅葉山文庫旧蔵。全四十一冊。

贈位内申書（ぞういなきんしよ）

『太平記』の世界は、江戸時代に歌舞伎や講談を通して人々に愛され、明治以降は国民教育の教材として用いられた。楠木正成の勤皇の精神が絶賛されたばかりでなく、正成の妻も日本女性の手本として称賛の対象に。展示資料は、昭和三年に天皇（昭和天皇）の即位礼が挙行されるのに伴って、大阪府知事から内務大臣と文部大臣に提出された文書。正成の妻に対する贈位が申請されている。

【武力の世界】

近江守護（六角定頼）家年寄連署奉書案（おうみしゅご（ろっかくさだより）けとしよりれんしよほうしよあん）（重要文化財）

国の重要文化財である『朽木家古文書』の中の一つで、天文十二年（一五四三）近江国守護六角氏の家臣から、朽木領に隣接して所領を有していた田中氏に宛てて出された奉書案。領内で山木を盗伐していた者を捕

らえたところ、報復として朽木商人が監禁されたことを記しており、自力救済の中世社会の様相を伺わせる。第十七軸に所収。

板倉勝重書状案（いたくらかつしげしよじょうあん）（重要文化財）

本文書も『朽木家古文書』から。元和二年（一六一六）に京都所司代板倉勝重から朽木元綱に対して出された書状案。当時の京で女性や幼児が誘拐され人身売買が横行していたことを記しており、戦国の戦場で黙認されていた誘拐や略奪等の一端を垣間見せる文書。第三十八軸に所収。

【戦国の信仰】

浅井久政同長政連署起請文（あざいひさまさどうながまされんしよきしよもん）（重要文化財）

『朽木家古文書』所収の文書。永祿十一年（一五六八）十二月十二日付で近江国小谷城主浅井長政とその父久政から、朽木領主の朽木元綱に宛てて出された起請文で、浅井氏が朽木氏と明確な同盟関係を構築するために出したもの。起請文とは誓約書の一種で、前書と罰文（神文）から成り、前書には誓約の内容が、罰文には誓約を破ると神罰・仏罰をこうむる旨が記されている。重要な契約は、このように起請文を取り交わし、神仏によって担保されるのが一般的であった。第三十三軸に所収。

【戦国の女性】

北条家裁許印判状（ほうじょうけさいきよいんぱんじょう）

『豊島・宮城（としま・みやぎ）家文書』のうちの一つ。小田原北条氏の家臣、尾崎大膳の家督について、元龜三年（一五七二）六月二十一日付で出された北条氏の裁許状。討ち死にした大膳の家督を娘が相続することに、一族の尾崎常陸守と相論になっている。大名家にとって必要な存

在であれば、女性による相続も認められていた点が注目される。なお、年月日の所に捺されている朱印は、通称「虎の印判」と呼ばれる北条氏の印鑑。「禄寿応穩」の文字の上で虎がうずくまっている。

【おあむ物語（おあんものがたり）】

享保初年（一七一六）頃までに成立したと思われる、青春時代を戦国の混乱の中で過ごした女性の思い出話。主人公の「おあむ」は、石田三成の家臣の娘で、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いのおり、石田方の美濃大垣城で敵方武将の首の処理や戦場からの逃亡等を体験する。「おあむ」の語りの言葉に、戦国の世の実像が感じとれる。天保八年（一八三七）刊。全一冊。

【歴史と物語】

【御実紀（ごじつき）（東照宮御実紀）】

本書は、通称『徳川実紀』と呼ばれるもの。林述斎、成島司直ほかにより、天保十四年（一八四三）に完成した幕府編纂の正史で、家康から十代家治に至る歴代将軍ごとの治績を編年体で記し、逸話については付録としてまとめたもの。実録的な部分の本編と逸話部分の付録とで、意識的に内容を選別している様子が読み取れる。東照宮は家康のこと。紅葉山文庫旧蔵。全四百八十五冊。

【語られる戦国時代】

【寛政重修諸家譜（かんせいちゅうしゅうしよかふ）】

文化九年（一八一二）に成立した、幕府編纂の大名・旗本らの系譜集。寛政十年（一七九八）までの系図を新たに提出させ、『寛永諸家系図伝』を全面的に改訂したもの。本書は、諸書や古記録などを比較検討し、解決し

なかつた部分については疑義のある旨を記載しておくなどの編纂方針で編集されていることから、他の書籍と比べてみることで、同じ事項を扱いや学問の流行など、様々な要因によって歴史は書き換えられるものであった。紅葉山文庫旧蔵。

【「正史」と「四大奇書」】

【三国志（さんごくし）】

後漢時代（二五～二二〇）末期の争乱から、魏・蜀・呉の三国鼎立、そして晋による統一（二六五年）までの出来事を記述した歴史書で、「魏志」三十卷・「蜀志」十五卷・「呉志」二十卷からなる。後の歴史物語『三国志演義』に登場する人物の伝記を数多く載せる。紅葉山文庫旧蔵『二十一史』【三国志】は第六十五～七十六冊。

【三国志通俗演義（さんごくしつうぞくえんぎ）】

本書は、数多くある『三国志演義』の刊本の一つで、万曆十九年（一五九二）に刊行されたもの。『三国志演義』は、劉備・関羽・張飛の義兄弟三人が、後漢時代末期の争乱の中で活躍し、諸葛亮という天才軍師を迎えて「蜀」を建国する歴史物語。紅葉山文庫旧蔵。全十二冊。

【李卓吾先生批評西遊記（りたくごせんせいひよゆうさいゆうぎ）】

『李卓吾先生批評西遊記』は、『西遊記』に豊富な評語と精緻な挿絵を入れて明時代に刊行したもの。『西遊記』は、唐の高僧である玄奘三蔵が、孫悟空・猪八戒・沙悟浄を供に従え、さまざま苦難を乗り越えて天竺へ仏教の経典を取りに行くという、日本でもお馴染みの物語。紅葉山文庫旧蔵。全十冊。

【忠義水滸全書（ちゅうぎすいこでん）】

『忠義水滸全書』は、『水滸伝』の刊本の一つで明時代に刊行されたもの。『水滸伝』は、宋の徽宗皇帝の時代、梁山泊に集まった百八人の豪傑たちの活躍を述べた物語。昌平坂学問所旧蔵。全三十二冊。

金瓶梅（きんべいばい）

『金瓶梅』は、『水滸伝』から派生した物語で、豪商の西門慶が主人公。『水滸伝』において、西門慶は武大の嫁である潘金蓮の情夫となり、武大毒殺の件で潘金蓮とともに武松（武大の弟）に殺される。ところが『金瓶梅』では、武松の復讐を免れ、潘金蓮を含む六人の夫人と淫蕩の日々を送るといふ物語になっている。紅葉山文庫旧蔵。全二十一冊。

〔仁正寺藩主・市橋長昭と湯島聖堂献納本〕

東坡集（とうばしゅう）（重要文化財）

北宋時代を代表する文人である蘇軾（一〇三六～一一〇一）の詩文集。「東坡」はその号。蘇軾は、詩文に優れた才能を発揮し、唐宋八大家（唐宋時代を代表する八人の文章家）の一人に数えあげられる。蘇軾の詩文は、我が国においても非常に尊重された。本書は、『東坡集』として現存する最古の版本で、南宋時代（一一二七～一二七九）に刊行されたもの。京都・西禅寺から妙心寺大龍院の僧嬾庵を経て、市橋長昭の架蔵となった。市橋長昭旧蔵。全十二冊。

淮海集（わいかいしゅう）（重要文化財）

北宋時代の文人である秦觀（一〇四九～一一〇一）の詩文集。「淮海」はその号。蘇軾に、屈原（戦国時代末期の著名な詩人）ほどの才能があると絶賛され、黄庭堅（一〇四五～一一〇五）・張耒（一〇五二～一一二二）・晁補之（一〇五三～一一一〇）らとともに「蘇門の四学士」といわれる。本書は、南宋時代の乾道九年（一一七三）の刊行されたもの

ので、巻末に印刷製本費を記した珍しい刊語がある。市橋長昭旧蔵。全十冊。
予章先生文集（よしやうせんせいぶんしゅう）（重要文化財）

北宋時代の文人である黄庭堅（一〇四五～一一〇五）の詩文集。「予章」はその号。黄庭堅は、蘇軾にその才能を見いだされ、「蘇門の四学士」といわれる。黄庭堅の詩文は、蘇軾と同様に、我が国においても非常に尊重され、黄庭堅の詩文集の注釈書や抄録が数多く作られた。本書は、南宋時代の孝宗・光宗の在位期間（一一六一～一一九三）に刊行されたもの。市橋長昭旧蔵。全七冊。

右のほか以下の資料を展示しました。

「続日本紀」「日本後紀」「続日本後紀」「日本文徳天皇実録」「日本三代実録」「新刊吾妻鏡」「本朝通鑑」「大日本史」「大鏡」「平家物語」「源平闘諍録」「義経記」「曾我物語」「舞の本」「謡本」「太平記之秘伝理書」「尋常小学読本」「秋夜長物語」「大乘院寺社雑事記」「甲斐国妙法寺記録（続群書類従）」「家忠日記」「甲信両国信玄衆被召抱時指上誓紙写」「多聞院日記抄」「おきく物語」「三河物語」「豊臣記」「聚楽物語（関白物語）」「武徳大成記」「朝野旧聞衷藁」「御実紀（台徳院殿御実紀）」「落穂集」「千年の松」「寛永諸家系図伝（草稿本）」「寛永諸家系図伝（献上本）」「藩翰譜」「譜牒余録」「旧唐書」「宋史」「癸辛雜識・続集」「宣和遺事」「書（集伝纂疏）」「九経直音」